

陳舜臣さんを語る会通信

NO.32 Mar. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年3月10日

書きたかったテーマ、半身麻痺と闘い完走『チンギス・ハーン一族』

本号では、陳舜臣さんの作品中、まだ、当「通信」で取りあげていなかった大作の一つ『チンギス・ハーン一族』を紹介いたします。初出は、「朝日新聞」1995年4月5日～97年5月31日（763回掲載）です。

陳さんにとって、朝日新聞から執筆依頼を受けたとき、順風満帆に見えたのですが、脳内出血による入院・リハビリ、そして退院4日後の大震災と、多難な連載開始になりました。

下の枠内は、朝日新聞社発行『チンギス・ハーン一族』「あとがき」からの転載ですが、一部、97年6月3日付朝日新聞夕刊からも引用しています。

（編集委員 橘雄三）

朝日新聞社版表紙 →

題字：陳舜臣 装画：畠中光享



『チンギス・ハーン一族』

「あとがき」を中心に
文中、傍線は編集委員加筆

中国の通史を書こうとする人は、「元」のところで足踏みするのがふつうである。チンギス・ハーンが登場するあたりから、歴史は、もはや「中国史」を超えてしまうかなのだ。

モンゴル軍は中央アジアを席卷し、カフカスをこえてヨーロッパに兵を進めた。しかし、モンゴル人は記録することにそれほど熱心ではなく、この方面の歴史記述はおもにイスラム教徒にまかされた。主としてペルシャ語で書かれ、それまでの漢字による記録とは、様相が大きく異なる。（中略）

中国史の環を結ぶには、チンギス・ハーンをうまく取り扱わねばならない。中国史を小説で書いてきた私にとって、「チンギス・ハーン一族」の時代はどうしても力の限り取り組まねばならない宿題であった。

そろそろ始めようと思っていたところに、朝日新聞社から連載の話がもちこまれた。しかも、テーマはチンギス・ハーンで、すくなくとも二年以上はつづけるという条件であった。

まるで私の心のうごきを見すかしたような話であるといわねばならない。

陳舜臣さんは、すでに十分な取材旅行・予備調査の上に、『耶律楚材』をはじめ、チンギス・ハーン周辺をテーマにした作品を数多く執筆され、朝日新聞社からの話に答えるに足る蓄積がありました。だから、「朝日新聞に約束した」こと、どの連載は自家薬籠中のもので、執筆にそれほど苦労することはあるまいと思っていた」のです。

私としては順風満帆のつもりであつた。かねて書きたいと思っていたテーマが、私が要求するまでもなく、ちょうど好い時にむこうから迎えに来てくれたのである。しかも、取材はあらかたすんでいった。私は大きく息を吸いこみ、運命の神の好意を謝した。

陳さんの意気込みが読み取れます。

ところが、その年の八月十日、宝塚八十周年の行事で講演の最中に、脳内出血で倒れるという不測の出来事が起きます。

意識は戻っても、「右手右足がまったくうごかないのに愕然とした」と述懐されています。

私は左手で書いてみたが、一日一枚でいどであつた。新聞の一回分は三枚弱である。それでも入院中に二十回分ほど書いた。

動きにくい右手も、無理に使わなければ、機能の回復が遅れるので、左手で支えて右手で書くことにした。『チンギス・ハーン一族』の原稿二千二百八十九枚のうち、二千二百枚以上はこうして書かれた。ワープロも病院で習ったが、どうも私の性に合わないようなので、実際には使わなかった。こうしてようやく連載が終わった。

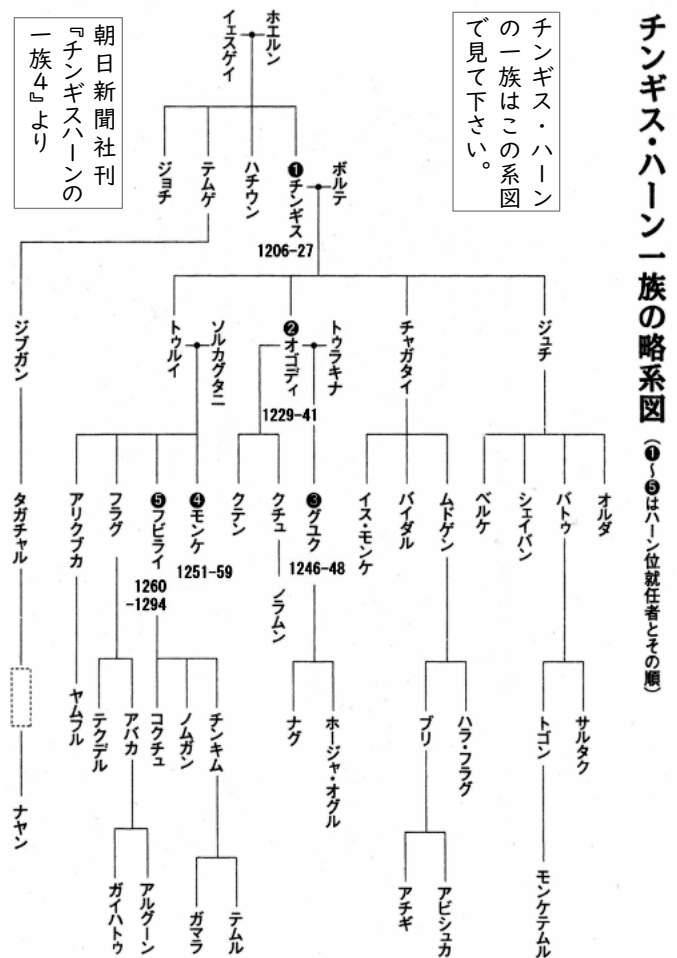


一九九七年六月三日付
「朝日新聞」夕刊

『チンギス・ハーンの一族』主な登場人物 と系図

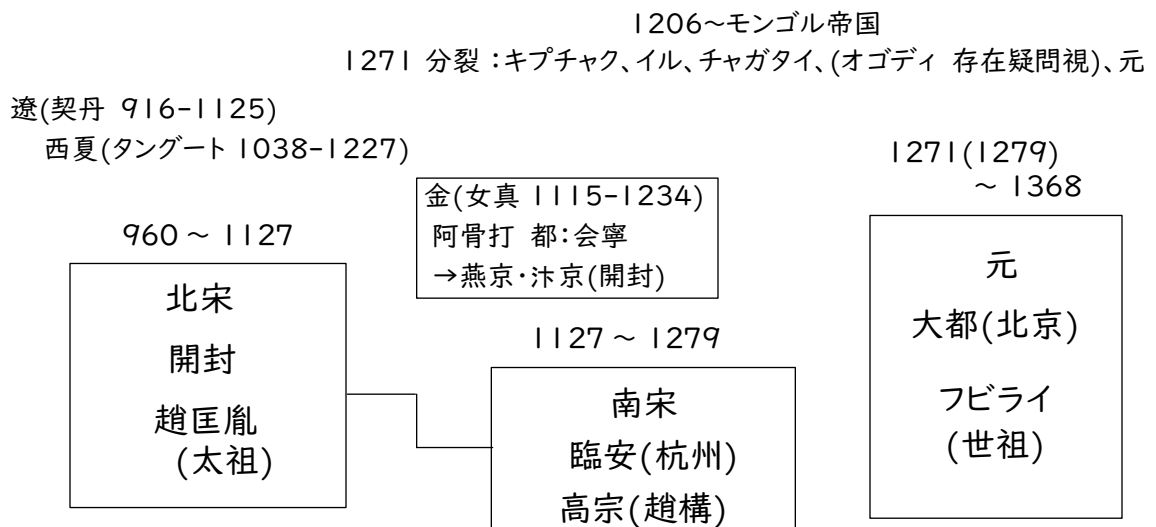
テムジン (チンギス・ハーン)	遊牧民の首長の子として生まれるが、幼くして父を失う。父の盟友(アムダ)のトオリルが指導するケレイト族の支援を受ける。1189年、28歳で可汗に推戴され、全蒙古を統一してヨーロッパにまで遠征する。モンゴル帝国の創始者。(1162?-1227)
マリア	ナイマンの王族パウロの娘。たぐいまれな美貌の持ち主。ネストリウス派のキリスト教徒
サラディン (サラフ・ウッディーン)	アッバース朝のカリフ(教主)からスルタンの称号を許されていたイスラムの王。クルド族出身で、1187年、十字軍を破りエルサレムを奪回する
トオリル (ワン・ハーン)	金から「王(ワン)」の称号を得たケレイトの国王。チンギスの父イエスゲイの盟友でキリスト教徒。チンギスと同盟するがのちに対立
ジャア・ガンボ	ワン・ハーンの弟。兄に敵対してチンギスに味方する
ジャムハ (グル・ハーン)	チンギスの盟友であったが、宿命的ライバルとなる
クチュルク	チンギスに亡ぼされたナイマンの王タヤン・ハーンの子。国破れ、カラ・キタイ(西遼)に亡命、のち乗っ取る
チュルク (グル・ハーン)	カラ・キタイの王。放浪のクチュルクを受け入れる
グルペス	ナイマン王タヤン・ハーンの子。愛妃だったが、ナイマン国滅亡でチンギスの後宮に入る
フラン	メルキトの部族長ダイル・ウスの美しい娘。チンギスの後宮に入り、第二オールドの主となる
イエスイと イエスケン	チンギスの後宮にいる姉妹。タタル出身で第三、第四オールドの主
スルタン・ムハンマド	アラ・ウッディーン・ムハンマド。フワリスム(ホラズム)の王。モンゴル軍に追われ、カスピ海中の小島で病死。息子のジャラル・ウッディーンに後事を託す
ムカリ	モンゴルの将軍。東方戦線を指揮
ジェベ	もとタイチウト族の武將。弓の名手。モンゴルに降り、ヨーロッパ遠征軍を指揮
スプティ	チンギスの親衛隊出身。ジェベの西征を補佐する。のち将軍として金の都汴京(べんけい)攻めの指揮や、ジュチの子バトゥのヨーロッパ遠征を補佐する
やりつあかい 耶律阿海	もとはケレイトに派遣された金国の使者。チンギスと意気投合して覇業をたすける。語学の天才にして騎射にすぐれた契丹人。弟、耶律秃花
してんげい 史天倪・天沢	慈善団体清樂社の主宰者。モンゴルに降る。弟天沢(てんたく)があとを継ぎ、史家軍団を率いる
ちょうじゅう 張柔	漢人世侯の一人。配下に武装集団を持つ。ムカリから金牌をもらい自治を許される
やりつそざい 耶律楚材・鑄	金に仕えた契丹人の官僚だったが、燕京陥落でモンゴルへ降る。チンギスの側近。愛称、ウルツサハリ(長いひげ)。のち、息子鑄(ちゅう)がフビライの廷臣となる
きこくこうしゅ 岐国公主	金の衛紹王の娘。和議の条件としてチンギスに嫁ぐ。漢公主とも呼ばれた
ちょうしゅんしんじん 長春真人	王重陽を開祖とする道教教団の全真教教主。チンギスより神仙大宗師の爵号を与えられる
ようりし 姚里氏	遼東国王耶律留哥の未亡人。夫の死後七年間、摂政を務める

トゥラキナ	第二代ハーン・オゴディの皇后。わが子グユクの即位に努める。即位のニヶ月後、急死
ファティマ	トゥラキナの侍女。妖術をあやつる。失脚→処刑
アブドゥル・ラフマーン	色目人。第二代ハーン・オゴディの寵臣となり、皇后トゥラキナの後楯をえて権力を振うが失脚→処刑
ソルカグタニ	トゥルイの正妃。モンケ、フビライ、フラグ、アリクブカの母で、大きな存在。ネストリウス派のキリスト教徒
ヤラワチ	モンゴルに投降したウルゲンチの賢人。東の宰相耶律楚材と並び西の宰相と呼ばれ財政面で手腕を発揮
アラムダル	モンケの寵臣。モンケの末弟アリクブカの介添役。フビライの勢力をそぐことに力を注ぐ。敗れ処刑
ようすう 姚枢	フビライの漢人幕僚
かくけい 郝經	漢人幕僚。フビライに「経国安民の道」を説く。使者として派遣され南宋に十六年間拘留される
ちようりょうひつ 趙良弼	フビライ幕下、漢化した女真人。女真兵をもって南宋を攻める。国信使として、二度、日本に渡る
かじどう 賈似道	南宋の全権を握る実力宰相。古今の名筆を大金を投じて集めている。流刑地への途中、扼殺される
バヤン	フビライの弟フラグの自慢の家臣。のちフビライの右腕
ほじゅこう 蒲寿庚	福建泉州の色目人。南宋の貿易・税関の監督者で世界最大の船主
文天祥	ぶんでんしょう。南宋の忠臣。本号4頁に詳述
張世傑	南宋の軍人。亡命政権「漂流王朝」を指揮する
りくしゅうふ 陸秀夫	南宋亡命政権の大臣。厓山の戦いに敗れ、幼帝を抱いて入水する
ラシード	イル・ハーン国の宰相で歴史家。『集史』を書く



『チンギスハーン一族』いくつかの補足

時代概観



朝日新聞社刊『チンギスハーン一族』各巻あらすじ

巻	表紙	内 容
1		アジア内陸部の草原の国、ナイマンの王女・マリアは内乱の故国を遠く離れコンスタンティノープルにいた。ちょうどその頃テムジンはクリルタイにより二十一氏族の長に推戴された。テムジンは自らをチンギスと名乗り、国家建設の一步を踏み出した。マリアはチンギスを訪ねるために帰国する。二人は幼なじみであり、若く美しいキリスト教徒であるマリアに、チンギスはほのかな想いを抱いていた。
2		耶律楚材を得てチンギスは帝国をいっそう強大なものにしていった。しかし巨星チンギスが墜ちると後継者問題が浮上する。息子たちはその座を狙っての権謀術数を巡らす。母や妃、そしてマリアをはじめとする女性たちの期待と不安の中、チンギスの三男オゴディが二代ハーンの座に。三代グク、四代モンケと後継者たちは西へと勢力を伸ばし世界帝国へと膨張を続けるが、分裂の影が忍び寄っていた。
3		四代皇帝モンケは西へと帝国の勢力を伸ばしていった。しかし四川遠征の途中病死してしまうと、皇帝の弟であるフビライとアリクブカとの間で骨肉の後継者争いが始まった。知恵と力で相続争いを制し、五代皇帝となったフビライだが、膨張したヨーロッパにまで及び西方戦線の失敗と、長期にわたる南宋との戦いに苦悩する。その末に定めた標的は海の彼方、日本だった。
4		モンゴル帝国から元王朝を創始したフビライだったが、彷徨う南宋の王朝をも攻めきれず、苦悩の末の二度の日本遠征までも失敗に終わる。チンギスやオゴディの時代に独立した王家(西方のハーン国)も反乱を起こす。草原の一地域から起き、ヨーロッパから東アジアまでも国の版図とし、東西の文化交流までも支配した帝国は、静かに終焉を迎えようとしていた。

朝日新聞社刊『チンギスハーン一族3』より



幕末の志士のバックボーンとなった南宋の忠臣文天祥の生きざま

ぶんでんしょう

陳舜臣さんも私(橘)も、更に言えば、日本人は文天祥に思い入れがある。『チンギス・ハーン一族』『亡国の譜』(『朝日新聞』1997年1月13日朝刊)から少し引用して、このあたりを紹介いたします。

南宋末の忠臣、文天祥(一二三六〜八二二)は江西省吉安の客家である。

元軍が南宋の都臨安(今の浙江省杭州)に迫ると、朝廷の大臣はつぎつぎ逃亡、その数、数十人にのぼった。朝廷では、これを補うため若い官僚を昇進させた。そのため思いがけない歳で宰相に任じられる人も出てきた。丞相文天祥もそんな一人であった。

文天祥らは、城を背にして一戦することを主張したが、この主戦論は評判が悪く朝廷はモンゴルに降参する決心をした。文天祥は志と違い、降伏の使者として元軍に赴いた。

元軍の司令官バヤンは、自信に満ち理路整然と意見を述べる文天祥に感動、なんとかしてこの人物を元のために用いたいと、元への投降をすすめた。文天祥は承諾しない。バヤンはついに彼を抑留してしまった。

バヤンは、ごく少数の軍隊を派遣して宮城や官衙を接収させ、一般市民はいくつ政権が変わったかも知らず平穩に支配者の交代が行われた(一二七六年)。

朝日新聞連載『チンギス・ハーン一族』
「亡国の譜」(九十七年一月十三日朝刊)から

バヤンも文天祥対策を考えていた。

接すれば接するほど、殺すには惜しい人物であるとかわかってきた。といって、彼は降ることを拒みつづける。元によって殺されることを欲している。だから自殺などはしないのだ。どうやら残忍な刑を望んでいるようだった。残忍であればあるほど、文天祥は喜ぶよ

うである。

——モンゴルには、車裂きの刑はあるのか？

と、文天祥はきいたことがある。

——なぜそんなことをたずねるのか？

と、バヤンは問い返した。

——いろいろと殺され方を考えている。釜ゆでとか、一寸刻みとか、あるいは袋に詰めて川に投げこむとか。誰にも忘れられない殺され方が私の望みだ。

と、文天祥は言った。

文天祥は隙を見て逃走、故郷の江西へ帰り義兵をあげる。やがて彼は梅州に入り、梅州の客家に「起兵救国」を呼び掛ける。当時、梅州の客家人口一万人のうち八千人が文天祥軍に加わったと言われている。

都臨安における元への政権引き渡し後、主戦論を唱えた宰相陸秀夫ら一部少壮官僚は、臨安陥落時の皇帝恭宗の兄、次いで弟を擁立し、広州湾入り口の孤島、厓山に拠る。

この間、陸秀夫らは陸上の文天祥軍と呼応



江西省吉安、文天祥紀念館
画像前面、大きな石像は文天祥
後ろの植え込みの文字「文山」は文天祥の号
1997年、編集委員撮影

しつつ再度上陸を企てようとするが、文天祥は再び元軍に捕らえられる。
やがて厓山も陥ち(一二七九年)、陸秀夫は八歳の幼帝を抱いて海に沈む。南宋にとつて、まさに平家の壇の浦であった。
このあと、文天祥は北京へ護送される。彼の才能を高く評価したフビライは、硬軟両面で帰順工作を進めたが功を奏さなかった。
やがて、彼は地下牢に移される。この地下の土牢で処刑までの三年間を過ごす。獄中で作った「正気歌」は元に捕らえられてもなお屈せず、忠節を貫き通す気持ち伝えていた。
このあたり、「千載の心」の章に詳しい。
特に、大都の宿舎で対面した二人の娘に贈る詩は涙をそそる。
日本では、「正気歌」を読んだ藤田東湖が「和文天祥正気歌」という漢詩を作ったことから有名となり、幕末の志士の愛唱するところとなった。